

アコースティック・ギター・マガジン

2026
SUMMER
ISSUE
VOLUME 109

特典
小冊子

AGM
SONG
BOOK

ザ・ビートルズ

ポール・マッカートニー・
アコギ名曲選

<https://www.rittor-music.co.jp/> **RittorMusic**

ACOUSTIC GUITAR MAGAZINE



●THE INSTRUMENTS

BROMO GUITARS

ペッテリ・サリオラ
with 井草聖二

アントワヌ・ボワイエ

小倉博和

押尾コータロー

●SPECIAL PROGRAM

Acoustic side of Paul McCartney

ギタリスト、
ポール・

マッカートニー至上主義

ポール流 2フィンガー 徹底解説

見識者 ガレアッツ・フルドゥア

イタリア出身。1988年に立ち上げたFrudua Guitar Worksのルシアー兼ビートルズ・リサーチャー。高校1年生の時にビートルズの虜となり、現在はハーモニーや演奏を分析するYouTubeチャンネル“The Beatles Vocal Harmony”も運営。総再生回数は4,000万回以上、登録者数18万人以上を誇る。
https://frudua.com/donate.htm

ポールのアコギといえば2フィンガーだろう。この独自の奏法は、実は3フィンガーでは表現できないさまざまなメリットがある。YouTubeでさまざまな分析動画を公開し、ビートルズ・ファンの間で名物マニアとして知られる(?)、ガレアッツ・フルドゥアに登場願い、ポール流2フィンガーのあれこれを徹底的に解説してもらおう!

チャオ! 僕の名前はガレアッツ・フルドゥアです。イタリア人のギター・ルシアーで、ギター製作学校の運営なんかもしているよ。その傍らで、僕は長年ビートルズ研究に勤しんできた。YouTubeチャンネル“The Beatles Vocal Harmony”でその成果を発信していて、彼らのハーモニーや演奏、録音などについて徹底研究しているんだ。時には、著名な研究家の定説を覆すような発見をすることもあるよ。

ポール・マッカートニーのアコースティック・ギター・プレイに関しても、僕はかなり研究を重ねてきた。先日、この雑誌の編集者から“彼の2フィンガーをマニアックに教えてほしい”という光栄なオファーをもらったので、解説していこうと思う。

本題に入る前にまず、そもそもポールが弾くアコースティック・ギターの何が魅力かを、3つお伝えしよう。

・ギター1本で曲全体を完成させてしまうアレンジ能力。歌がなくても成立するくら

い演奏そのものが豊か。技巧を見せるためではなく、常に曲、メロディ、歌詞のためにギターが存在している。

・誰も真似できないプレイ・ニュアンス。技術的には平均的でも手が届くが、演奏のリズム、強弱、ミュートなどが独特で、正真正に学んだギタリストには出せないものがある。

・退屈なくり返しを避け、細かな変化を盛り込むこと。これは、ビートルズの音楽がどんな人にも親しみを与え、虜にする要因のひとつでもある。

驚くべきことに彼は、これらを歌いながら同時にやっている。僕はそこにポールの天才性を見るんだ。

●2フィンガーの出自と利点

ポール流2フィンガー・スタイルの出自は、本人が異なる説明を何度もしているから断言はできないけど、本格的に完成したのは1968年頃だ。インド滞在中にドノヴァンから3フィンガーを学ぼうとしたものの、きっちり覚えず、我流で身につけたのがあの2フィンガー奏法だとされている。ポールはどの楽器にせよ、“誰かからの教えを自分流に解釈して覚える”ところがあるんだ。

2フィンガーのメリットについても説明しておこう。最大の利点は、ベース、ハーモニー、メロディが一体化していること。親指が低音を安定して支え、人差指がリズムやコード、時には歌に対するカウンター・メロ

「Yesterday」の2フィンガー



中指と人差指をくっつけ、2本の指でしゃくりあげるようにアップ・ピッキングする。指肉を中心にヒットしつつほんの少し爪も当て、マイルドなトーンを生み出そう。



このおじさん
有名な
のかワン?

え、
イタリアまで
捜査を
広げたん
ですわ

警察犬
ドッグ・ワカラン

ボル畑任三郎

ディまで担う。その結果、ギター1本が小さなアンサンブルとして機能するんだ。人差指でストラムも単音弾きもできるから、2本のギターが同時に鳴っているようにも感じられる。彼の2フィンガーは単なる奏法ではなく、“ギター1本で編曲する技法”なのかもしれないね。

●「Yesterday」から「Blackbird」への進化

1965年の「Yesterday」の録音でも、彼は2フィンガーを駆使している。けど、その頃の基本奏法はシンプルで、“親指がベース、人差指がストローク”という役割に過ぎない。隣の中指を支えのようにつっけながら、アップ・ピッキングで弾いているね（左下写真）。後年の演奏ではダウン・ピッキングになっていたりするけど、ビートルズ時代は必ずアップだ。あと「Yesterday」では、ヴァース（“had to go I don't know”のところ）がとても知的だね。低音弦でベースを弾きながら、高音弦ではまるでダブル・トラックのように、ボーカルと同じメロディを弾いている。

1968年頃、その2フィンガーはひとつの完成を迎える。「Blackbird」だ。ポールはたった1本のギターで、弦楽四重奏を書きみせたんだと僕は思う。ベース音はチェロ、ペダルのG音はヴィオラ、高音弦は第一バイオリン、そして歌メロは主旋律のバイオリンとして機能しているんだ。「Blackbird」で彼は、事実上の新しいフィンガーピッキングを発明した、と言ってもいい。「Mother Nature's Son」も、小編成のバンドが演奏しているようなアレンジだね。重要なのは指の本数ではない。彼がどんな音楽的結果を

生み出しているか、なんだ。

ちなみに、技術面では「Yesterday」の頃から大きくレベルアップしているわけではないと思う。1965年の時点で、「Her Majesty」や「Junk」のようなプレイができる素養はあったはずだよ。

● 親指と人差指の動かし方

親指の役割はもっぱら6～4弦のベースだ。多くの場合、「Junk」や「Mother Nature's Son」のように1拍につきひとつのベース音を弾く。例外は「Jenny Wren」で、ふたつの低音弦をトントンと交互に弾いているね。弾き方のコツは、指の腹を下向きに下ろし、「ドスッ」というクリーンで重たい低音を出すことかな。まあ親指に関しては、一般的な3フィンガーとさして変わらないよ。

大事なのは、リズムとメロディの両方を担う人差指の弾き方だ。ダウン・ストロークは、手首のスナップというよりは指をフリックさせる動き（デコピンに近い）だね。アップ・ストロークは、指の付け根の関節を曲げながら自然に弦をはじく感じ。

ここで気になるのが、爪の長さだよな？ 長すぎではいけなくて、1.5mmくらいが理想だと思う。爪が長すぎると音が細く硬くなってしまい、ポールらしい温かく丸みのあるサウンドにならない。爪でアタックを作りつつ、指先の肉も弦に触れている状態が理想だね。

● グルーヴとダイナミクス

ポールが人差指で生み出すグルーヴは、自然なスウィング感と、ほんのわずかなルーズさがある。これがプレイに息吹を与え

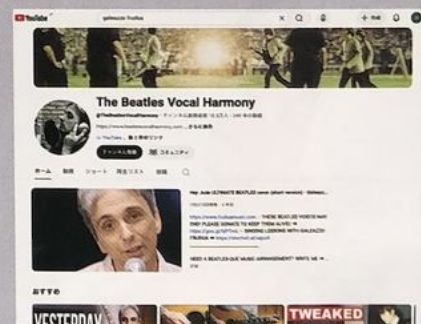
ているんだ。もし機械のように弾いてしまうと魅力が台なしだから、あまりスクウェアにならないよう気をつけてほしいね。

彼の2フィンガー奏法の基本パターンは、①親指と人差指でそれぞれ1本の弦を引っ張るように鳴らす、②人差指の小さなストラム。大体はこのくり返しなんだけど、この小さなストラムがダイナミクスを大きく左右する。ストラムの向きや強弱を、曲が求める感情表現に合わせて巧みに使い分けているね。

以上、どうだったかな？ かなり細かく解説したけど、本人はいたって楽々とやっているんだよね。だから神経質になりすぎずに、指先より耳を鍛えてマスターすべきかもしれない。ポールの2フィンガーは、単なる曲の伴奏ではないからね。“曲そのものの鼓動となる演奏”とでも言うべきなんだよ。

YouTube チャンネル必見！

The Beatles Vocal Harmony



「Blackbird」の2フィンガー



ポールの2フィンガー奏法の基本パターン。まず親指と人差指で弦を引っ張るように鳴らしてから、人差指の小さなストラム。手首はそれほど動かさず、軽くデコピンするような感覚でダウン・ピッキングし、自然に戻ってくるようにアップ。